



極小規模保育所における幼児の基本的な動作の種類 と出現頻度の一考察

メタデータ	言語: jpn 出版者: 公開日: 2022-04-15 キーワード (Ja): キーワード (En): 作成者: 高瀬, 淳也, 高橋, 正年, 河本, 岳哉, 村上, 雅之, 中島, 寿宏 メールアドレス: 所属:
URL	https://doi.org/10.32150/00007114

極小規模保育所における幼児の基本的な動作の種類と出現頻度の一考察

高瀬 淳也・高橋 正年*・河本 岳哉**・村上 雅之***・中島 寿宏****

北海道教育大学旭川校保健体育教室

*東海大学

**北海道教育大学附属札幌小学校

***札幌市立北九条小学校

****北海道教育大学札幌校保健体育教室

A Case Study on the Frequency and Use of Fundamental Movement Skills among Children at a Small Nursery School

TAKASE Junya, TAKAHASHI Masatoshi, KAWAMOTO Takeya,
MURAKAMI Masayuki and NAKAJIMA Toshihiro

Hokkaido University of Education Asahikawa

*Tokai University

**Graduate School of Education, Hokkaido University of Education

***Sapporo Elementary School Attached to Hokkaido University of Education

****Hokkaido University of Education Sapporo

要 旨

本研究では極小規模保育所の自由遊びにおいて出現する動作の種類や頻度について調査、分析を行い、運動遊びの実態をとらえるとともに、極小規模保育所の運動遊びを充実・発展させるための示唆を得ることを目的とした。調査は、全幼児が6名の極小規模保育所において、5歳児男児1名、4歳児男女各1名を対象に、自由遊びに出現した動作をカウントして、分析した。その結果、『たつ』『はしる』『あるく』『のぼる』の動作は、対象幼児3名とも多く出現しており、これらの動作は保育所の規模に関わらず、幼児にとって多い動作と考えられる。その一方で、複数あるいは集団遊びのような場面で見られる『くむ』『かわす』『かくれる』などの動作は、ほとんど見られなかった。また、『なげる』『とる』『ける』『かわす』のような動作もあまり見られなかった。これらの動作は小学校の体育授業においても必要な動作であり、これらの動作を極小規模保育所でどのように経験させていくかについて、今後の課題となった。

1. はじめに

我が国は、人口減少と少子化が進展し、令和35年（2053年）には総人口が1億人を下回るという予測がある（国立社会保障・人口問題研究所，2017）。都市部では、待機児童の問題で保育所不足が取り上げられる一方、人口減少の著しい地域では、定員割れを起こす保育所等も見られている。このような保育所等は、採算性の観点から統廃合が進められているものの、へき地や離島などの過疎地域では、保育機関が皆無になることを避けるため、全幼児が10名程度でも認可外保育施設（以降、極小規模保育所）として存続させる地域も見られている。このような極小規模保育所の課題の1つに、運動遊びに適した人数を確保しにくいことがあげられる。

幼児期は「運動機能が急速に発達し、体の基本的な動きを身につけやすい時期であることから、多様な運動刺激を与えて、脳をはじめ、体内の様々な神経回路を発達させていくことが必要」（日本発育発達学会，2014，p.5）と言われている。また、「子ども同士のかかわりから運動のきっかけが生まれたり、遊びが深まることによって運動量や運動の種類を多く経験するようになる」（朴，2018，p.73）という報告もある。つまり、幼児期は多くの友達と関わりながら活発に運動遊びを行うことで、多様な動きの経験を通して、運動技能を獲得できるようにしていくことが重要と言える。

しかし、極小規模保育所では同年齢や前後の学年の友達が極めて少なく、その中で運動遊びを発展させたり多様な動きを経験させたりすることは、困難と言える。現在、全国の市町村の約半数は過疎地域に該当しており、小規模化した保育・教育機関を有する地域が、今後も増加すると予想される。このことから、小規模化した保育・教育機関において、幼児期の運動遊びをどのように充実させていくかが、今後も課題になっていくと考えられる。

幼児期の運動遊びを対象にした研究の中に、どのような動作がどれくらいの頻度で出現するか

について調べたものがある。例えば、油野（1988）や田中（2009）などの調査・報告があるものの、その多くは一定の人数が確保された保育所を対象にしている。これらの先行研究から、小規模化した保育・教育機関では、人数が少ないために多様な動きが出現されにくいことは想像ができる。しかし、極小規模保育所において、具体的にどのような動作が出現しにくいのかについて明らかにしたものは、ほとんど見るができない。そこで、本研究では極小規模保育所を対象に、自由遊びで出現する動作の種類や頻度について調査・分析を行い、運動遊びの実態をとらえるとともに、極小規模保育所において運動遊びを充実・発展させるための示唆を得ることを目的とした。

2. 方法

(1) 対象

本研究では、北海道上川管内にある市立A保育所に在籍する幼児のうち、登所から自由遊びの30分間で、4日間欠けることなくビデオ撮影ができた5歳児の男児1名、4歳児の男女1名ずつの計3名を対象にした。対象保育所では対象児3名の他、3歳児の女児2名、2歳児の男児1名という構成であった。

調査日は、2021年6月8～11日であった。調査当時、対象幼児3名の身長、体重は表1の通りであった。

表1 対象幼児3名の身長・体重

年齢	身長	体重
5歳児男児 (5歳4ヶ月)	110.5cm	17.5kg
4歳児女児 (4歳2か月)	97.8cm	14.2kg
4歳児男児 (5歳2ヶ月)	107.7cm	17.6kg

(2) 観察方法

本研究では、幼児が登所してから遊技場の片付

けが始まるまでの時間（9時10分から9時40分）を対象にした。撮影は、遊技場で自由遊びをする幼児を4台のビデオカメラで行った。ビデオカメラの設置場所は、対象児の自由遊びの妨げにならないよう保育者と相談して遊技場の四つ角に設置した。また、死角が出ないようにそれぞれのビデオカメラの向きや角度を調整した。この方法で撮影した映像を用いて行動観察を行った。

出現した動作のカウントは、4台のビデオカメラの映像を観察し、遊びの中の動作が吉田(2005)の基本動作42種のどれと合致するかを検討し、時系列にそって記録し、カウントした。吉田(2005)の基本動作42種は、幼児の遊びに見られる動作を類似性・系統性・連続性を考慮して整理されており、本研究の結果を基に、今後、極小規模保育所に通う幼児にどのような動作を経験させるとよいか検討する際にも有効な資料にもなると考え、用いることとした。なお、本研究が対象保育所の遊技場で行われることから、『およぐ』については除外した。吉田(2005)の42種の運動は、基本動作とそれぞれの具体的な動作が示されており、それに倣い本研究では、基本動作を『 』、具体的な動作の例を「 」で示すこととした。

動作の開始や終了については、油野(1988)、及川(2014)、真砂(2018)の先行研究を参考に、以下のようなルールを設定してカウントした。

- ・カウントは、動作の停止、動作の後に別の動作が見られた時点を動作の完了・区切りとする。
- ・動作が失敗したり、途中で中止したりした場合は、動作が完了していないと判断し、カウントしない。
- ・動作が完了するまでに複数の動作が含まれる場合（立った状態から、一度しゃがんでから座るなど）は、最終的な動作をカウントする。
- ・保育者の援助を受けて動作が遂行される場合は、幼児の動作遂行能力などを考慮してカウントの是非を判断する。

以上の観察方法を3回繰り返して行った。カウントに相違のあった箇所については、遊びに見られた動作について再度見直し、必要に応じて動作

の定義の見直しや追加・修正を行いながら、カウントの有無を判断した。

(3) 遊技場の環境について

対象保育所は、遊技場の広さが約100平方メートルであった。遊技場には、複合型滑り台、トランポリン、鉄棒、跳び箱、平均台が常設されていた。また、ウレタン積木もあり、いずれも幼児が自由に使って遊ぶことができていた。ボールは、直径約40cmの塩化ビニル樹脂のボール4個、直径約20cmのスポンジボール5個、直径10cmのゴムボール7個、直径約13cmのスプリングボール（ナガセケンコー株式会社）6個があった。

(4) 倫理的配慮

調査にあたっては、対象保育所の所長に了承を得た上で、保育士から保護者に対して書面で研究の意義、調査の方法、データ管理、データの使用範囲、参加の拒否ができることなどについて説明を行った。なお、本研究は北海道教育大学の研究倫理委員会の審査で承認を受けて実施した。

3. 結果

(1) 5歳児男児

平衡系動作では、『たつ』が4日を通して多く見られた。『たつ』は、保育者や下級生と座って話したり、遊びと遊びの合間の休憩の前後などで、「すわる」「しゃがむ」「たつ」動作が多く見られた。そのほかに、『わたる』が多く、これは常設されている平均台に上り、その上を「わたる」動作が見られていた。

移動系動作の中では、『あるく』『はしる』や『のぼる』が多く見られた。男児は、4日間を通してテレビキャラクターの真似をして遊んでおり、新聞紙で作成した模擬刀を持って走る姿が多く見られていた。『のぼる』は図1の複合滑り台のスロープを利用して「のぼる」動作が多く見られていた。これに合わせてスロープを「すべりおる」ことや「とびおる」ことなども見られていた。『とぶ』では、「かたあしけんけん」「ジャンプ」が見られていた。これらの動作は、遊技場にケンパコース

が設置されており、男児は移動途中にケンパコースを通った際に出現していた。また、『とぶ』動作の中の「とびあがる」も多く見られたが、これは遊技場に8段と7段の跳び箱（図2）が置いてあり、その上に上る動作が見られていた。



図1 遊技場にある複合滑り台



図2 遊技場にある跳び箱

操作系動作の中では、『ひく』が最も多かったが、平衡系動作や移動系動作に比べると出現回数が少なかった。『ひく』は、3日目に長いひもを使って綱引きのような遊びが展開された際に見られていた。『なげる』『ける』『うつ』は、ボールを使って遊んだ際に見られた動作であった。この動作は、保育者と一緒に遊んだり、一人でボールを投げたり蹴ったりする中で見られた。使用していたボールは、直径が約20cmのスポンジボールであり、男児は片手で握って投げることができていた。保育者は、基本的に手で操作してボールを送っていたが、5歳児男児は「なげる」「ける」動作で返球するほか、手の平でボールを「うつ」動作も見られた。5歳児男児は、9時前には登所しており、他の幼児が登所するまでの時間、保育者とキャッチボールをして遊ぶ様子も見られていた。一方で、4日間を通して下級生とボールを使って遊ぶ姿が

ほとんど見られなかった。『まわす』は、フラフープを立てた状態で鉛直方向を軸に「まわす」動作が見られていた。これは、下級生がフラフープで遊んでいるところに加わった際に見られていた。

(2) 4歳児女児

平衡系動作では、『たつ』動作の回数が多かった。4歳児女子は地面に座って工作することが多く見られており、材料を取りに行ったり完成した作品を保育者や下級生などに見せに行ったりする際に、「たつ」動作が出現していた。また、『まわる』『ぶらさがる』の回数も多かった。これらの動作は、遊技場に常設している鉄棒を使って遊ぶ際に見られていた。4歳児女児は、前回り下りや鉄棒にひざをかけて『ぶらさがる』ことができ、他の子どもが鉄棒で遊ぶ姿を見かけると、鉄棒まで移動して一緒に遊ぶ様子も見られた。また、保育者から「すごいね」と声をかけられると、「先生、見て」と言って、繰り返し前回り下りを行っていた。

移動系動作では、『あるく』や『のぼる』が多く見られた。男児2名に比べると『のぼる』の数が多いとはなかった。これは、4歳児女児は床に座ったり作業用の机を利用したりする時間が長く、複合型滑り台の上に『のぼる』ことが少なかったためと言える。また、うれしい時や楽しいことがあると、スキップをしながら移動する動作が見られており、『はねる』回数が増えていた。『はう』は、2日目にトンネルを使って遊ぶ中で「四足ではう」動作が見られ、特に好んでトンネルを使って遊んでいたことから、回数の増加につながった。

操作系動作では、『まわす』の回数も多かった。4歳児女児は、3つのフラフープを腰部で同時に回すことができ、保育者や来所した保護者に『まわす』様子を見せたりもしていた。また、フラフープを床に立て鉛直方向を軸に「まわす」遊びも行っており、このことによって回数が多くなっていた。その他の動作は、あまり見られなかった。全体的に4歳児女児は、保育者と一緒に工作したり鉄棒やトランポリンを使って遊んだりして

おり、操作系動作の出現が少なかった。

(3) 4歳児男児

平衡系動作の中では、他の2名同様に『たつ』が最も多く出現していた。4歳児男児は、3日目に保育者が準備したトンネルを使った遊びや、4日目にウレタン積み木をつかってお店屋の建物を作るために「すわる」「たつ」を繰り返しており、『たつ』の回数が多くなっていた。また、『わたる』も多く、5歳児男児と同様に平均台に上り、その上を移動する動作が多く見られていた。

移動系動作では、『あるく』『はしる』『のぼる』が多く見られた。しかし、4日目は『はしる』は6回、『のぼる』は2回と、3日目までに比べて極端に少なくなっていた。これは、4日目にウレタン積み木でお店の建物を作る遊びによって、走ったり複合滑り台に上ったりする動作がほとんどなかったためと考えられる。一方で、2日目に新聞紙で作った模擬刀を持って、下級生を追いかける遊びを繰り返し行っていたため、2日目の「はしる」「おいかける」は、1日目、3日目に比べ約2倍の回数となっていた。また、4歳児男児は、走り初めと終わりにホップのように跳びあがる動作を行っており、『はしる』『はねる』の組み合わせが多く見られていた。

操作系動作では、『はこぶ』『もつ』が多かった。これは4日目のウレタン積み木でお店の建物を作る際に、「はこぶ」「おく」という動作を長時間行っており、回数の増加につながった。『ふる』の回数も他2名に比べ多かった。詳細に見ると1日目に12回カウントされていたが、そのほかは2日目の1回だけであった。1日目は、5歳児男児が模擬刀で遊ぶ姿に影響を受け、保育者と一緒に同様の模擬刀を作って遊んでいたことから、回数の増加につながった。2日目以降も、模擬刀を持って遊んでいたが、「ふりまわす」よりも、下級生を「おいかける」の方が多く見られていた。

4. 考 察

対象幼児3名を見ると、『たつ』『はしる』『あ

るく』『のぼる』の動作が共通して回数が多かった。これは、遊具のある場所へ移動したり遊具を運んできたりなど、様々な遊びにともなわれて見られており、回数の増加につながっていたと考えられる。登所後の室内での自由遊びを調査した油野(1988)や園庭で自由遊びを調査した真砂(2018)の報告も、同様の傾向があることから、これらの動作は、幼児にとって頻度の高い動作と考えられる。

一方で、平衡系動作の『くむ』『さかだち』、移動系動作の『かくれる』『かわす』、操作系動作の『ほる』『ささえる』『ころがす』などは、4日間で一度も観察ができなかった。油野(1988)は「不活発児と普通児の出現回数に共通して少ない動作である『おう・おいかける』『かわす・にげる・にげまわる』『おこす・ひっぱりおこす』『おおう・おぶさる』『つかむ・つかまえる』『うける・うけとめる』『わたす』などは2人又は、複数人でしかできない動作であって、遊び友達、遊び相手、遊び仲間の多少が動作の出現に影響していることがうかがえ、活発児のように遊び仲間の中心的存在であるとき、種類・頻度においても高い値を示すことになる」と報告している。この報告では、「活発児」「不活発児」「普通児」を抽出して調査を行っているが、いずれにしても一定数の幼児が在籍する保育所においても出現の少ない動作であることを考えると、対象保育所のような極小規模保育所では、『くむ』『かわす』のような複数人でしかできない動作は、なおさら出現しにくい傾向にあると考えられる。

このような中、遊技場を円を描くように走る途中に、ケンパコースに入って「かたあしけんけん」の動作をしたり、幼児の身長よりも高い跳び箱によじ登ったりなど、様々な動作の出現が遊具によって引き出されていた。対象保育所では、ケンパコースや複合滑り台のほか、平均台やトランポリン、跳び箱や鉄棒などが常設されており、このことが、幼児の動作の出現に貢献していたと考えられる。しかしながら、「物的環境が整っていても幼児がそれを使用して遊ぶとは限らず、幼児が多様な基本的な動きをより一層経験できるように

表2 対象幼児3名の4日間の合計及び基本動作と具体的な姿
(基本動作及び具体的な姿は、吉田(2005)を引用)

基本動作		5歳児 男児	4歳児 女児	4歳児 男児	具体的な姿
平衡系 動作	まわる	0	9	2	まわる ころがる
	おきる	1	0	0	ねる ねころぶ おきる おきあがる
	たつ	77	75	70	たつ たちあがる かがむ しゃがむ すわる かとあしてたつ つまきでたつ
	くむ	0	0	0	つまかさなる くむ おんぶする
	わたる	9	4	11	わたる とんでわたる あるいてわたる はしってわたる またぐ
	さかだち	0	0	0	さかだちする
	ぶらさがる	1	11	1	ぶらさがる
	のる	0	0	0	のる のりまわす
移動系 動作	はう	1	8	5	はう 四足ではう
	あるく	101	86	89	あるく ふむ よこむきであるく うしろむきであるく つまきであるく すりあしであるく とまる
	のぼる	47	27	36	のぼる はいのぼる よじのぼる とびのる おりる すべりおりる とびおりる
	とぶ(垂直)	8	33	2	とぶ とびつく とびあがる とびこす ジャンプ かとあしけん
	はねる	5	27	27	はねる スキップ ホップ ギャロップ 2ステップ
	はしる	41	36	100	はしる かける おいかける にげる かけあがる かけおりる
	くぐる	3	2	4	くぐる くぐりぬける はいる はいりこむ
	およぐ	0	0	0	およぐ もぐる
	すべる	0	3	0	すべる
	かくれる	0	0	0	かくれる
	かわす	0	0	0	かわす よける
操作系 動作	つかむ	2	0	1	つかむ つかまえる とる にぎる かかえる つかまる だきつく しがみつく
	もつ	4	3	19	かつぐ もつ あげる もちあげる おろす おく
	なげる	4	0	5	なげる なげあげる あてる ぶつける なげおとす
	ける	3	0	2	ける けりあげる けりとばす とめる
	あてる	3	0	2	あてる あたる ぶつける ぶつかる
	とる	0	0	0	とめる うける うけとめる うけとる
	ほる	0	0	0	ほる けずる すくう
	ふる	4	0	13	ふる ふりまわす ゆらす ふりあげる ふりおとす ふりかける
	はこぶ	0	5	13	はこぶ うごかす
	わたす	1	4	1	わたす
	ささえる	0	0	0	ささえる
	つむ	0	0	2	つむ つみあげる くずす
	たおす	0	0	0	たおす おしたおす
	おす	0	1	2	たおす つきおとす おす おしだす おしのける
	おさえる	1	2	2	おさえる おさえつける もたれる もたれかかる よりかかる
	ひく	11	6	11	おこす ひっぱりおこす ひく ひっぱり ひきあげる
	うつ	6	0	4	うつ うちあげる うちとばす たたく たたきつける パンチ
	こぐ	0	0	0	こぐ
	まわす	7	14	11	まわす
	つく	0	0	2	つく つつく さす つきさす
つく(ボールなど)	1	0	0		
ころがす	0	0	0		

支援していく必要がある」(篠原, 2019)とされているように、環境設定だけではなく、保育者がいかに幼児にはたらきかけるかも、動作の出現に影響すると考えられる。本研究では、保育者がトンネルや縄跳びなど様々な遊具を提示して「～

してみよう」「…するといいよ」というように動作を促したり、実際に動作の手本を見せたり一緒に動いてみたりする姿が見られていた。特に、5歳児男児に対しては、ボール遊びを提案し、「上手だね」「ナイス」などの声をかけながら一緒に

遊ぶことによって「なげる」「ける」「うつ」の動作を出現させることができていた。「指導者自身が、ときには少し年上のおにいさん、おねえさん役になってあこがれの存在になったり、遊びのリーダーとなることが子どもの遊びを豊かにすること、すなわち多様な動作を引き出すことにつながる」(吉田, 2005)という報告のように、保育者の積極的なはたらきかけが幼児の多様な動きを引き出していくことは、これまでも数多く報告されてきている。極小規模保育所において、本研究の保育者が幼児に積極的にかかわることは、人数が少ないことを補いながら多様な動きを出現させるためにも、特に重要と言えるだろう。

最後に、本研究において出現の少なかった動作の中に『かわす』『なげる』『とる』『ける』『あてる』『ころがす』などが見られていた。これらの動作は、小学校の体育授業において、鬼遊びやボールを使ったゲームで必要な動作であるが、これらも複数人で活動することで出現される動作と考えられる。就学前にこれらの動作が十分に経験できなかった場合、小学校低学年に体育授業を中心に学習内容や手立てを工夫することも必要である。しかしながら、極小規模保育所の幼児が進学する小学校は、全校児童が少ない小規模小学校であることが多い。対象保育所の幼児の多くが進学する小学校も、へき地等級2級の指定を受ける全校児童26名の小規模小学校である。つまり5歳児男児は、小学校入学後も転校生が入ってこなければ、同学年の友達がいらない状態となる。このため、『かわす』『なげる』『とる』などの動作が出現しにくい状況が小学校入学以降も続き、体育授業にも支障をきたすことが懸念される。この点については、保育所などの保育機関と小学校が連携しながら、幼児期から低学年にかけて、どのような動作を経験させ習得させるとよいか、またそのためにどのような環境設定や遊びを幼児や児童に提供していくかを検討していく必要がある。このことについては、今後の課題としていきたい。

本研究は一保育所のための調査であり、極小規模保育所の実態や傾向を十分にとらえきることがで

きていない。今後、さらに複数の極小規模保育所での調査を進めていくことも必要と考える。

5. まとめ

本研究では極小規模保育所の自由遊びにおいて出現する動作の種類や頻度について調査、分析を行い、運動遊びの実態をとらえると同時に、極小規模保育所の運動遊びを充実・発展させるための示唆を得ることを目的とした。

その結果、『たつ』『はしる』『あるく』『のぼる』の動作は、対象幼児3名とも多く出現しており、これらの動作は保育所の規模を問わず、幼児にとって多い動作と考えられる。また、本研究では、対象保育所に設置されている遊具や保育士の積極的なはたらきかけによって、幼児の動作の出現を促すことができていた。その一方で、複数あるいは集団遊びのような場面で見られる『くむ』『かわす』『かくれる』などの動作は、本研究でほとんど見ることがなく、少人数の影響によるものと考えられる。また、『なげる』『とる』『ける』『かわす』のような動作もほとんど出現がなかった。これらの動作は小学校の体育授業において必要な動作であり、極小規模保育所でどのように経験させていくかについて、今後の課題となった。

謝 辞

本研究の実施に当たり、快くご協力いただきましたA保育所の保育士の皆さん、幼児および保護者の皆様に心よりお礼申し上げます。

引用・参考文献

- 油野利博 (1988) 幼児の自由遊び中における動きの種類について. 鳥取大学教育学部研究報告教育科学, 30 : 263-273.
- 朴淳香 (2018) 人とのかかわり. 岩崎洋子編著, 保育と幼児期の運動遊び第2版. 萌文書林: 東京.
- 国立社会保障・人口問題研究所 (2017) 日本の将来推計人口 (平成29年推計).

http://www.ipss.go.jp/pp-zenkoku/j/zenkoku2017/pp29_gaiyou.pdf (参照日2021年8月28日).

- 真砂雄一 (2018) 幼児における基本的な動きの種類と出現頻度について. 埼玉東萌短期大学研究紀要, 16: 99-106.
- 文部科学省 (2018) 小学校学習指導要領解説体育編, 東洋館出版社: 東京.
- 日本発育発達学会 (2014) 幼児期運動指針実践ガイド, 杏林書院: 東京.
- 及川直樹 (2014) 幼児の遊びの中で発現する基本動作の実態と関連要因の検討—地域子育て支援拠点を利用する親子を対象に—. 発育発達研究, 62: 44-55.
- 篠原俊明 (2019) 自由遊びにおける幼児の運動経験の実態, Leisure & Recreation (自由時間研究), 43(1): 28-34.
- 田中沙織 (2009) 幼児の運動能力と基本的運動動作に関する研究—自由遊びに見る運動能力別の基本的運動動作比較の試み—. 広島大学大学院教育学研究科附属幼年教育研究施設幼年教育研究年報, 31: 83-88.
- 吉田伊津美 (2005) 動作の理解, 指導内容の理解. 体育の科学, 杏林書院, 55(7): 507-511.

- (高瀬 淳也 旭川校准教授)
(高橋 正年 東海大学講師)
(河本 岳哉 附属札幌小学校教諭)
(村上 雅之 札幌市立北九条小学校教諭)
(中島 寿宏 札幌校准教授)